



経済Ⅱ 予想問題

試験情報

持ち込み不可

722 教室 9:00~10:30 (90分)

成績評価…筆記試験の成績のみ

試験の形式…オーソドックスな問題

大きくみて大問2つ

用語説明問題&ある話題に関する論述問題

用語説明問題

- ・設問は2つ
- ・一言（1行）で終わるタイプではない
- ・これこれの用語を使ってこの用語を説明しなさい、というような感じ
- ・ある程度のボリュームを書くことを想定
- ・言うなれば短めの論述問題

論述問題

長く書かせる論述問題

この授業でやったこと（商品とは何か/貨幣とは何か/資本とは何か）を聞く
この3つのことに関して最も強調していたことは何かを考えれば対応は簡単

勝手な予想

1. 用語説明問題

a)貨幣の物神（呪物）的性格とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

（「商品世界の共同事業」、貨幣の登場、直接的交換可能性、蓄蔵手段）

b)貨幣数量説批判とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

（流通速度、貨幣の流通手段機能、 $MV=PT$ （フィッシャーの恒等式）、商品取引総額、貨幣の蓄蔵手段機能）

2. 論述問題

資本とは「価値（自己）増殖する運動体」である。このことに留意して、貨幣からどのようにして産業資本形式という経済モデルが分化・発生するのか説明せよ。



用語説明問題対策

(1) 経済原論の対象

Q1 純粋資本主義とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(制度的要因、公共部門、商品的合理性)

純粋資本主義とは、国家、法律、国民性などの制度的要因や、政府や中央銀行といった公共部門の存在を抽象化した、経済原論が対象とする、それぞれのプレイヤーが自らの利益の最大化するために動く商品的合理性のみによって構築された資本主義経済の論理的構造のこと。(124字)

Q2 分化・発生論とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(純粋資本主義、商品、社会的再生産、「共同体と共同体との間」)

分化・発生論とは、経済原論の対象である純粋資本主義の考察方法で、ある一つの世界から別のものが分化・発生してきたとする考え方のこと。最もプリミティブな商品というカテゴリーから始まって、もともと必要生活手段とその生産手段の生産である社会的再生産とは無関係であり「共同体と共同体との間」に発生した商品経済が、その商品世界の内部から貨幣を発生させるなどして、いかにより複雑な構造を組み立てて社会的再生産を掴むかについて考える。(209字)

(2) 商品とは何か？

Q3 商品とは何かについて、商品論に基づき、以下の語句を用いて説明せよ。

(富(財産)、商品の使用価値、商品の価値)

商品とは、「資本主義経済における富(財産)の原基形態」であり、そのため純粋資本主義を考える上での最もプリミティブな要素である。これらは商品の異質性と有用性という性質から導かれる商品の使用価値と、商品の同質性と交換性という性質から導かれる商品の価値という「商品の二要因」を持つ。(138字)



Q4 「商品の二要因」とは何かについて、その関係性に留意しながら、以下の語句を用いて説明せよ。

(商品の使用価値、商品の価値、「他人のための使用価値」)

「商品の二要因」とは、商品の異質性と有用性という性質から導かれる商品の使用価値と、商品の同質性と交換性という性質から導かれる商品の価値のことである。そもそも商品の使用価値は商品の価値の前提となるものだが、商品の使用価値というのは買い手のためのもの、すなわち「他人のための使用価値」であるため、価値の実現によって商品が他人の手に渡らなければ実現され得ない。そして商品の価値は、商品の交換関係が結ばれたときにのみ実現するため、商品価値が実現した途端、商品は「他人のための使用価値」を失い、単なる使用価値となる。(252字)

(3) 貨幣はいかにして発生するか？

Q5 直接的交換可能性とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(価値実現、相対的価値形態、等価形態、左右の非対称性(両極性))

直接交換可能性とは、価値実現の決定権のことである。そもそも商品は他人の理解による価値実現を必要とするため、価値表現、すなわち価値形態を必要とする。このとき価値表現される商品は相対的価値形態をとり、価値表現の材料となる商品は等価形態をとる。そして等価形態をとっている商品が、相対的価値形態をとっている商品に対して、左右の非対称(両極性)と呼ばれる一方的な価値実現の決定権を握っている関係となっている。(199字)

Q6 左右の非対称性(両極性)とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(直接交換可能性、価値実現、相対的価値形態、等価形態)

左右の非対称性(両極性)とは、商品間の価値実現の決定権である直接交換可能性の一方的な関係のことである。そもそも商品は他人の理解による価値実現を必要とするため、価値表現、すなわち価値形態を必要とする。そしてこのとき価値表現される商品は相対的価値形態をとり、価値表現の材料となる商品は等価形態をとり、前者が後者に直接的交換可能性を譲り渡すような構図となる。(176字)



Q7 一般的等価物とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(欲望の間接化、「商品世界の共同事業」、排除、独占、価値の単位表示)

一般的等価物とは、全ての商品に交換を申し込まれる特殊な商品のことである。個々の商品所有者が他人の欲望を模倣する**欲望の間接化**が進み、社会的に最も交換手段として有用な交換商品に、間接的な欲望対象として人気が集中する。こうした個別商品の私事であるこの交換商品への価値表現の材料の単一化の結果として、すなわち「**商品世界の共同事業**」の産物として、一般的等価物は発生する。このとき一般的等価物は他商品に交換を呼びかけることができずに商品世界の外部に**排除**される一方で、全商品への直接的可能性を**独占**する。また一般的等価物は他のそれぞれの個別商品に対して、**価値の単位表示**としての役割も担う。(286字)

Q8 売りと買いの分離とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(貨幣の登場、買い手市場、「商品の命がけの飛躍」)

売りと買いの分離とは、貨幣だけが市場における唯一の購買手段となり、購買と販売がそれぞれ貨幣所有者と商品所有者という別個の手へと分離されることである。均質性と分割・合成可能性、軽量性と高価値性、耐久性と財産性をもった**貨幣の登場**によって、一般的等価物形態は固定され、単位表示が積極的に行われるようになる。こうすると全商品を含んだ集中的/全面構造的な**買い手市場**が成立し、貨幣以外の商品は価値実現のため、「**商品の命がけの飛躍**」と称されるように、自己存在を賭して貨幣に売り向うようになる。(238字)

Q9 貨幣の物神（呪物）的性格とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(「商品世界の共同事業」、貨幣の登場、直接的交換可能性、蓄蔵手段)

貨幣の物神（呪物）的性格は、貨幣というのはそもそも単なる商品であって、「**商品世界の共同事業**」の産物に過ぎないにもかかわらず、実際には貨幣が生まれながらにして特別であったかのように錯覚される、資本主義経済の根本にある錯覚のことである。均質性と分割・合成可能性、軽量性と高価値性、耐久性と財産性をもった**貨幣の登場**によって、一般的等価物形態は固定され、単位表示が積極的に行われるようになり、全商品対貨幣という市場の基本構造ができて、貨幣だけが価値実現の決定権である**直接的交換可能性**を独占し、また**蓄蔵手段**として不動の地位を築くことによって生まれる。(270字)



(4)貨幣とは何か

Q10 貨幣の価値尺度機能とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(価値表現、売りと買いの分離、商品の命懸けの飛躍、平均価格)

貨幣の価値尺度機能は大きくわけて2つある。第一に、貨幣の一定量を等価形態とする価格表示の統一により、商品世界に共通の**価値表現**材料を与えることである。第二に、貨幣の持つ購買手段機能ともよばれるもので、商品売買の場に一定の規制力をもった**平均価格**を実現していく。これは購買と販売がそれぞれ貨幣所有者と商品所有者という別個の手へと分離される**売り**と**買いの分離**が進むことによって貨幣だけが市場における唯一の購買手段となり、商品が「**商品の命がけの飛躍**」と称されよう価値実現のために貨幣に売り向かうようになる中で、貨幣所有者が並んで繰り返し購買を行うことで、一定の幅をもった平均価格が割り出されることで生じる。(298字)

Q11 貨幣の流通手段機能とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(W_1-G-W_2 、買いのための売りの手段、流通、通流)

貨幣の流通手段機能とは、商品流通を社会的規模で組織することである。すなわち W_1-G-W_2 にもみられるように、商品 W_2 を手に入れるために、 W_1 がいったん貨幣 G となり、その後 G を用いて商品 W_2 が購買され、貨幣が**買いのための売りの手段**として機能する。このとき商品 W には持手変換、すなわち商品の**流通**がおき消費される一方で、貨幣 G は消費されることなく再び買いのための売りの手段として持手変換、すなわち貨幣の**通流**がおきる。(196字)

Q12 貨幣数量説批判とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(流通速度、貨幣の流通手段機能、 $MV=PT$ (フィッシャーの恒等式)、商品取引総額、貨幣の蓄蔵手段機能)

貨幣数量説批判とは、**流通速度**に注目し市場の外部からの調整は困難だと考えることを特徴とする、 $MV=PT$ (**フィッシャーの恒等式**)の解釈である。そもそも**貨幣の流通手段機能**によって商品流通を社会的規模で組織化され、商品が流通、貨幣が通流し、また貨幣以外で商品を買することができないという議論を踏まえると、貨幣数量(M)×その流通速度(V)=商品価格(P)×商品取引量(T)というフィッシャーの恒等式が成立する。このとき $M=PT/V$ と考えると、市場の状態を表すのは**商品取引総額**である PT となる。そして**貨幣の蓄蔵手段機能**を受けて、 M が増えても V は貨幣が貯め込まれることで下がり、 M が減っても V は貨幣が切り崩されることで上がる、すなわち V が貨幣数量の影響を緩和すると考えることで、貨幣を流通手段の側面にしか注目せず貨幣数量が市場を調整できると考えている貨幣数量説に対して批判を加え、市場は調整できない不確定な世界だと考えている。(395字)



Q13 貨幣の蓄蔵手段とは何かについて、以下の語句を用いて説明せよ。

(貨幣蓄蔵、蓄蔵貨幣、鑄貨準備金、到富欲)

貨幣の蓄蔵手段とは、**貨幣蓄蔵**と呼ばれる貨幣が商品流通の外部への引き揚げが積極的に行われ、そこで価値を**蓄蔵貨幣**として貯め込むという機能のことである。貨幣の再流通を前提とした商品流通からの離脱によって生まれる**鑄貨準備金**と異なり、本来の意味での「貨幣の蓄蔵」は、貨幣の直接的交換可能性の独占と「耐久性」や「財産性」に期待して、人間の**到富欲**を満たす最適の対象としてこれを貯め込むことだと理解される。(195字)

論述問題対策

(論述問題そのものには指定語句はないといっていたような気がしますが、(5) 資本とは何かから用語説明が出たときに、そのまま使えると思ったので、残しときました。)

(5) 資本とは何か

Q14 資本とは「価値(自己)増殖する運動体」である。このことに留意して、貨幣からどのようにして産業資本形式という経済モデルが分化・発生するのか、以下の語句を用いて説明せよ。

(貨幣退蔵、剰余価値、商人資本形式、売買差損、平均価格、金貸資本形式、寄生的、信用関係、実質的不確実性、 $G-W \cdots P \cdots W'-G$ 、産業資本形式、労働力、生産手段、「資本の原始的蓄積」、労働者の二重の意味での自由)

貨幣を使わずに貯め込むことを**貨幣退蔵**というが、単純な貨幣退蔵から手を切って、貨幣を殖やすために貨幣を使うことが資本である。すなわち通常の商品流通である $W-G-W'$ の関係から、再販売するために商品が買われ、その売買益が**剰余価値**として資金を投入した主体が手にする $G-W-G'$ ($G + \Delta\alpha$) の形へと変化する。この資本として最も典型的な運動形式となるのが、「安く買って高く売る」という形式、いわゆる**商人資本形式**である。この形式においては、「何でも買える」貨幣 G' が取引の末尾につくため、資本の運動は反復性を伴う流動的なものとなる。しかし商人資本形式には一定の限界がある。第一に、価値増殖の不確実性が指摘される。剰余価値は価格のバラツキによる売買差益を利用して生まれるものであるため、また同時に**売買差損**を被る可能性も十分有り得、そのため価格増殖の内在的根拠が欠如しているのだ。また第二に、商人資本形式での資本の運動は反復性を伴うため、商品価格には、一定の幅をもった**平均価格**の成立が加速化しやすい。価格の分散や変動は起こらないものの、商人資本形式の運動そのものが価値増殖の幅・期間を狭めてしまっている。

このような商人資本形式の限界の克服を試みたのが $G \cdots G'$ ($G + \Delta\alpha$) で表される**金貸資本形式**である。これは貨幣を期限付きで貸し、一定期日に貨幣の返済を受け、その見返りに一定の利子を得るというものである。これは返済期間と利子が事前に確定されるという点で、商人資



本形式よりも高い価値増殖の確実性を持っている。しかし実際には金貸資本形式の利子の源泉は、借り手の取得した剰余価値＝売買差益、つまり借り手の商人資本形式の運動に依拠する**寄生的**な性格ため、様々な限界をもつ。第一に、形式的には確実性をもつようにみえる金貸資本形式も、その価値増殖を商人資本形式に依存しているため**実質的不確実性**を抱え、**信用関係**に伴う貸し倒れのリスクを負っているということ。そして第二に、利子の源泉が借り手の取得する売買差益である以上、必然的に利子は売買差益よりも小さくなるため、ローリスクではあるがローリターンの資金運用方法であるということである。

ではこれらを克服し、価値増殖の確実性を持ち、社会全体で支配的となり得る資本運動形式とはどのようなものであるか？ここで生まれたのが買った商品を新しい商品へと加工する「生産」というプロセスを含んだ $G-W \cdots P \cdots W'-G$ で表される**産業資本形式**である。この形式においては、価値増殖は W と W' の間の生産過程の中で起きる。ここで注目されるのが消費されることで新価値を生産し、さらに剰余価値をも生産でき特殊な商品である**労働力**である。さらにこの労働力に**生産手段**を別途付け加えることによって、原料を加工して新たな製品を作る生産過程が組織される。産業資本形式においては W と W' は単に使用価値が異なるだけでなく、価値量をもが異なり、この両者の差が剰余価値になる。すなわち生産過程における価値増殖の分、 W の買値や W' の売値など市場の**不確定な変動を緩衝でき、価値増殖の内在的な根拠が確立**する。

このような産業資本形式への移行には「**資本の原始的蓄積**」、すなわち労働市場が成立し、労働力が商品化することが歴史的条件である。これはすなわち、さまざまな身分的な拘束からの解放によって自らの労働力を商品として売り得るという自由と、生産手段や生活手段からの解放によって自らの労働力を商品として売らざるをえないという制約という**労働者の二重の意味での自由**が非市場的＝暴力的な手段を通じて初めて達成されたときに起きる。(1470字)